ヤーコプ・マイラントの《カンツィオネス・サクレ》（1564 年）について
――その音楽様式・改訂・歌詞選択――

大角 欣矢

16 世紀後半のドイツ語ルター派圏で数多く生み出されたラテン語モテットの精査・評価はまだあまり進んでいない。ヤーコプ・マイラント（1542-1577）の作品は当時人気を博し、その第一作《カンツィオネス・サクレ》（1564、改訂版 1573）は筆写譜や混成印刷譜を通じて広範な流布を見た。その所収曲全 17 曲（改訂版では 18 曲）のほとんどは、冒頭で通模倣が用いられるほかは、ほぼホモリズミックな和音様式を基調とし、歌詞の語調に応じてリズムを自在に操作する表現力豊かなデクラメーションに特色がある。しかし部分的には、声部間のリズム的ずらし、経過不協和音の挿入、部分模倣の織り込みなどにより、声部同士の微妙な交錯が生み出す綾が全体の豊かな響きに絶妙な陰影を与える精妙な書法も見られる。また歌詞の解釈表現のための固いロ音（b durum）と柔らかいロ音（b molle）の寓意的な使い分けも注目される。この曲集は 1569 年と 1572 年に同一内容で再版された後、1573 年版では大幅な改訂が施された。形式的簡潔さが目指される一方、各声部のずらしや独立性を強調する精妙な書法への傾向が強まった。以上のことを、最も広く流布した第 16 曲〈王笏はユダを離れず〉に即し、その歌詞出典である創世記 49 章に対するルターの解釈と関連づけながら分析した。本曲集の歌詞出典は 2 曲（改訂版では 3 曲）の機会作品を除けば聖書だが、教会暦関連の聖句や牧会学的に重要な「慰めに満ちた／教訓的」な聖句のほか、3 曲の雅歌モテットのような（ルターの解釈に従えば）「政治的」に理解すべき聖句も多い。これらの音楽は君主への表敬であるとともに、神の言葉による霊的統治と、世俗的統治との間の相互的関係を教えることで、宗教と政治の美的媒介として機能した。